

弘前劇場公演 作・演出／長谷川孝治

家には高い 木があつた

「うちの秋はどうですか」
「暑くもなく寒くもなく、いいですね」
「こっちは春から初夏にかけてがいいんですよ」
「あ、聞いたことがあります」
「ほう」
「長い冬が終わって、5月になるといんなんなものが新しい始まりになるんだそうですね」
「新しい始まり…うさぎがそう言ったんですか」

福士賢治 畑澤聖悟 後藤伸也 永井浩仁
佐藤誠 山田竜大 佐藤てるみ 藤本一喜
高橋聡子 大作綾 赤刈泰子 佐藤弥栄
長谷川等 木場勝己

キャスト

舞台監督／野村眞仁 照明／中村昭一郎
音響／原島正治(舞台音響 難組)

スタッフ

装置／鈴木徳人 制作／佐藤誠

主催／東京国際舞台芸術フェスティバル99実行委員会

財団法人地域創造

青森演劇鑑賞協会

見附市文化ホール

協賛／株式会社日本エアシステム

トヨタ自動車株式会社

アサヒビール株式会社

企画制作／弘前劇場

■チケット取扱／東京公演・チケットぴあ 03.5237.9988

(一般のみ・学生券は劇団のみ取扱)
伊丹公演・チケットぴあ 06.6363.9999 (一般のみ)

AI HALL 0727.82.2000

■「弘前公演」弘前市内各プレイガイド(10月3日発売開始)

「青森公演」青森演劇鑑賞協会 0177.22.7944

青森市内各プレイガイド(10月3日発売開始)

■「新潟公演」見附市文化ホール 0258.63.6321 (12月上旬発売開始)

「チケット料金」全席自由(東京・伊丹公演は日時指定・整理番号付)

一般前売 二〇〇〇円(当日 二五〇〇円・新潟 二〇〇〇円)

学生前売 二〇〇〇円(当日 二五〇〇円・新潟 二〇〇〇円)

高校生以下 一五〇〇円(全公演前売・当日共 一五〇〇円)

■全公演取扱 問い合わせ／弘前劇場 0172.62.0717 時間外 090.3124.0339

《東京公演》

東京国際舞台芸術フェスティバル リージョナルシアター・シリーズ

1999.10.23[土] マチネ14:00～・24[日] 14:00～

東京芸術劇場 小ホール2 171-0021 豊島区西池袋1-8-1 TEL. 03.5391.2111

《伊丹公演》AI HALL リージョナルシアター

1999.10.30[土] 19:00～・31[日] 14:00～

AI HALL 664-0846 伊丹市伊丹2-4-1 TEL. 0727.82.2000

《弘前公演》1999.11.6[土] 19:30～・7[日] 15:00～

スタジオ・デネガ 036-8013 弘前市上瓦ヶ町11-2 TEL. 0172.32.1794

《青森公演》1999.11.11[木] 19:00～

青森県民福祉プラザ 030-0822 青森市中央3-20-30 TEL. 0177.77.9191

《新潟公演》2000.2.19[土] 19:00～

見附市文化ホール・アルカディア 954-0059 見附市昭和町2-1-1 TEL. 0258.63.5321

いわし雲が広がった。深い秋の空は、冬をころうじてまだ騙してそこに居続けた。日曜日のある日、朝の8時を過ぎて小学校1年の息子はなかなか起きてこなかった。新聞の隅々まで読み、折り畳んで母親に言った「史郎、死んでんじゃねえか」「アホ」母親は猫の缶詰を切りながらキッパリと言った。

前日、息子はジャックと豆の木の話に夢中になって午前様で、こっちは当日二日酔いだった。息子は伸びてのびて止まらない豆の木に恐怖を覚えたらしく、夜に「宇宙にはなんで空気が存在しないの」とか「宇宙は何ゼンメートル?」とか矢継ぎ早に質問を発した。そんなことはこっちも承知しない。なにしろ当方そこまで残念ながら行ったことがない。「木はどんどん伸びるの?」「そりゃあ、まあ、伸びるな」「でも庭の木はぜんぜん大きくならないよ」「うん、それはさ、人間の時間感覚と木の時間感覚は違うからさ……」「時間カンカクって、なに?」……「うーん」木の前でしゃがみ込みながら、木の生長を観察する半ズボン少年の自分をちょっとだけ想像した。

9時、息子がようやく起きてきた。早起きしていた小学校4年の姉は、ベリベリとトーストにバターを塗りながら言った「ラジオ体操、遅刻3回目」「うん」頭頂の毛が立って、今日の史郎はまるでシロクロの雄鳥だ。「ハンコ、押しといて貰ったからね」姉が恩着せがましく言う。「どうも」「なに、それ」「え?」「どうも、って言い方」「へ?」弟はまだ高級なものの言い方を知らない。心底弟を軽蔑したらしく、姉はブッチャッとオムレツにケチャップを勢いよくかけた。そこはそれ、親父の権威を示さなければならない。おごそかに(そのつもりで)私は言った。「時間は無限なんだ」「あ?」姉があという形に口を開き続けている。「馬鹿みたいだから、そんな口の開き方はよせ」などとは言わずに、私は黙って番茶を啜った。

季節の変わり目というのはある日突然やってくる。「今日から秋」自分でそう決めた日から秋なのである。「暦の上では今日が立秋……」テレビでアナウンサーがのたまっても、いわし雲が広がっても曇いものは曇い。ガラパン丁で氷イチゴをかき込んでるこっちは関係がない。それと同じように、言葉がホントの意味で肉体化するのには学校の教室であるのは減多にない。いつも突然に、まるで細い針金で作った芯に急速に肉付けがなされるようにして人は言葉を獲得する。その日の息子がそうだった。

風の中にはかろうじて秋が住み始め、オムレツが冷えていく。「おまえさ、半ズボンとランニング

シャツってもう寒いんじゃないか」史郎に忠告するのだが、彼はまるで昨日みたいに半ズボンとランニングシャツを着る。「父さん」「なに」「庭の木」「うん」「いつからあるの?」「いつから?……」「うん」……

庭の高い木は、私が生まれた時にはもう高くてそこにあった。私は植物の名前をひまわりと桜くらいしか知らないから、当然庭の木がなんという木なのか知らない。カミさんに尋ねてもいいのだが、なんだか馬鹿にされそうでメンドクさい。とにかく、庭の高い木は私が生まれたときも、父親が生まれたときもずっとそこにあった。7つ違いの弟が町立病院で生まれたときには、私はその木に登って町立病院をスルドク見守っていたのだ。「あ!」「え、なに?」台所で仕事をしているカミさんが驚いてこっちを見ている。それほど私の声は大きかったらしい。「あ、いや、なんでもない」「なによ、いっきなり、大っきな声出して、お茶、もつとは?」「いや、ごめん、もういい」「史郎、早く食べちゃいなさい」「うん」史郎のぼんやりした返事を聞きながら、上がり框で下駄をつっかけた。庭に出て、半分は土蔵のような物置の前に立った。全身で罪に力を含める、ゴゴツという音と共に扉は開いた。うっすらとカビのにおいがしてくる。天井のどこから朝の光が一筋入ってきていて、下駄を脱いでその光を頼りに急な階段を中二階に登っていく、ドキドキしていた、頭のどっかがシビれていた、カビのにおいの背後にナフタリンがあり、古い紙があった。しっかりした金具の鍵を回して大きな北向きにある窓を開け放つ。久しぶりに中二階を風が通った。

明治の人だった祖父は、地元の小学校の校長先生を退職するまで毎日昼には蕎麦を出前で取っていた。その習慣は退職してからも変わることなく、96歳で死ぬ前日まで続いた。そして、蕎麦の前には必ず御酒をいっぱいひっかけた。世の中が世知辛くなる前のことだ。「背表紙に金文字、背表紙に金文字……」呪文のようにつぶやきながら、私は、一日も欠かすことなく丹念につけられていた祖父の日記を探すことに没頭した。古いタンスを開け、古いナガモチを引っかき回し、古い新聞紙の包みをほごいた、そのたびに私は昔の私と出会った。筆箱の内側にこびりついてある鉛筆のカス、鉄製の書見台、大量に蓄えられていたベルマーク、錆び付いた自転車のベル、湿気てしまっている2B弾、通知表や胡桃の木で作ったパチンコや万華鏡がぞろぞろと出てくる。私はそれらのモノ達と確かに詰まった時間を過ごしたはずなのに、今は全く忘れていた。そ

のカケラさえない、そのことに私は呆然とした。立ち止まったり先を急いだりして、祖父の残した数十冊の三年連用日記を見つけたとき、私は大汗をかいていた。

Tシャツを脱いで額の汗を拭い、下の居間に向かって声をかけた「おーい、タバコ」しばらくして娘が縁側に顔を出した。「ここだ、ここ」あさっての方を見ている娘に、私は物置の中二階の窓から声をかけた。「あ、父さん、なんでそんなところの?」「いいから、タバコと灰皿」「うん、いま持ってくる」娘の姿が視界から消え、私の手元には祖父の古い日記帳が残った。ナス紺のそれは今にも崩れそうにして私の手の中にあった。ページをめくってしまおうと、すぐさまなくなってしまうようだった。祖父のたぶん70年ぶんの日記、日記、「そうか、私の時間はたぶん他人の中にあるのか」などと思いながらタバコを待った。

「へー、こんなところなんだ」娘はそう言いながら、私にタバコと灰皿を渡し、祖父が愛用していた電動マッサージ機に横になった。「なんか、固い」「もうだいたい古いからな」「昨日ね」「うん」「史郎、木から落ちたんだよ」「木ってそのか?」「うん」「で、どうした?」「尾てい骨をうったらしいよ」「なんでそんな大事なことをさ」「お父さん、毎日遅いからね」私の主張を最後まで聞かないで娘が言った。「吸わないの?」「え」「タバコ」「うん、吸うよ」私はあわててタバコに火を移した。なんだか小学校4年生の姉さんに諭される新児童のようだった。さやかに風は物置に入って、反転して出ていった。「史郎は?」「また木に登ってるんじゃないの、アイツ、懲りないから」下を見ると、史郎は木の幹に左手を当て、顔を天空にねじ曲げながら木の頂を見上げていた。

「昼っ、なんにするっ」台所から母親の声がする。「あたし、アーリオ・オーリオ!」電動イスから飛び跳ねて娘が叫ぶ、「史郎は?」母親の声に史郎は反応しなかった。彼はその日、言葉と時間を獲得するのに忙しかったのだ。木の時間と自分の時間、時計の時間と自分の時間、そして過ぎてしまったこととこれから来ることの狭間にいて、彼の脳味噌は静かに沸騰していたのだ。誰もが少年の匂いを消しながら大人になる。大人の匂いに敏感になりながら少女も大人になる。

どうやらわずか2時間ほどで夏は完全に死んだらしかった。秋の風は、史郎のランニングシャツをたなびかせて空に高く高く登っていった。

久しぶりに、本当に久しぶりに7つ離れた弟に手紙でも書こうかなと、私は思っていた。

JAS、弘前劇場 青森から全国へ



青森 ⇄ 東京・大阪・札幌・名古屋・福岡・沖縄(1月～3月 限定運航決定) 三沢 ⇄ 東京・大阪・札幌